



九州のほぼ中央に位置する熊本市は、九州の文化、交通、経済の拠点として古くから発展。熊本城築城後は城下町として栄えた。明治二十二年に市政が施行された。

熊本市の西部にそびえる金峰山から熊本市内を望む。キンと凍った空気の中、冷たい指先を息で暖めながら見る街は、白い布団を頭からかぶり、まだ眠っている。

熊本城が真つ先に目に入る。慶長十二年（一六〇七）、城の完成と共に、城も町もそれまで呼ばれていた「隈本」という名を改め「熊本」と呼ぶようになった。

今年九月に化粧直しを終えた天守閣が、白と黒のコントラストも凛々しく、こんもりと盛り上がる楠の緑から、スツクと背筋を伸ばしている。眠っている街の中で、城は早起きのように。熊本城の楠をはじめ、白い霧の中、市内のアチコチに冬だというのいうっすらと緑が浮かぶ。

「これは森の都だな」。明治二十九年、五高教授としてやって来た夏目漱石が上熊本に着き、人力車に乗って京町の新坂にさしかかった時、市内を眺めてこう言った。それからやがて百年経とうという今でも、「森の都」は健在で、白い布団には緑の模様が描かれている。

左手に見える立田山の麓には、漱石が、そしてラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が講師を勤めた五高の赤レンガの校舎が今も残る。

霧の向こうに雪化粧した阿蘇外輪山が見える。熊本市に比べて、阿蘇は寒い。それは、布団をかぶってないからかもしれない。

それをかわいそうに思った太陽が、外輪山から照らし始める。山脈が黄金で縁取られ、「おはよう」の光線が街いっばいに降りかかる。太陽によって夢から目覚めた熊本の街が、今日も動き始める。

早起きして覗いた街の夢